

テトラルキア時代ガリアにおける弁論家と皇帝

——『ラテン語称賛演説集 (Paneegyrici Latini)』より——

西村 昌 洋

【要約】 本稿は、『ラテン語称賛演説集』の分析を通して、後三〇〇年前後のガリアにおいて皇帝・宮廷とガリア人とのように利害を一致させ相互に結び付いたかを考察するものである。当時のガリア人たちが利用したのはレトリックの技能であり、称賛演説発表の機会である。ガリア人弁論家たちは修辞学の素養を活かして宮廷内に官吏として入り込み、故郷の再建や減税措置の嘆願といった利益誘導を行った。他方で、彼らは官吏として宮廷とのコネクションを得た以上、皇帝の意を受けたプロバガンデイストとしての側面も強い。しかし、そのプロバガンダの内容も、ガリアでの行政運営を支えるガリア人たちの利害や感情をかなり意識したものであることがテキストから読み取れる。帝国の分割統治という当時の政治的情勢の中、各地を訪れた皇帝・宮廷と現地属州人との間で容易に協力体制が成立し得る、こう考えることができるのである。

史料 九二巻二号 二〇〇九年三月

はじめに

ディオクレティアヌスが即位した二八四年からテオドシウスが没する三九五年までのおよそ百十年間のローマ帝国を特徴付ける要素の一つは、皇帝権力の分散である。この頃には、複数のローマ皇帝による統治領域の分担が常態化し、それぞれの皇帝が宮廷を構え、必要に応じてその所在地を変えた。イタリアの都市ローマはもはや皇帝の住まう都ではなく、皇帝たちは戦略上重要な拠点を移動していった。三九五年の分裂以後、東西の帝国が辿った歩みは大きく異なるわけだが、

三世紀末から四世紀末までの約一世紀間は、ローマ帝国にとって分岐へ至る過渡期だったと言える。ここで問題となるのは、帝国の各地へ向かった皇帝およびその宮廷と、宮廷所在地を抱えることになった各地の属州民との関係である。この後の帝国の変転を考えれば、実際にローマ皇帝（の内の一人）を迎えた属州民がどのように現実に対応したのかは、重要な問題である。本稿では、『ラテン語称賛演説集（*Panegyrici Latini*）』という史料を手がかりにこの問題を考えてみたい。

この演説集は、紀元二世紀初頭の小プリニウスの作品と、帝政後期の称賛演説十一篇、合計十二篇を含む。その内九篇は、情報がガリア地方に偏るものの、三〇〇年前後という他にあまり文献史料の残されていない時期をカバーしているため、ディオクレティアヌスからコンスタンティヌスまでの治世についての貴重な情報源である。またガリアは、後に政治的に成功した弁論家アウソニウスが生まれ活動した地であり、帝政後期にはレトリック教育が盛んだったことでも知られる。ここでは、三〇〇年前後という後期ローマ帝国の初期段階、属州ガリアを検討の対象とし、トリア（古名アウグスタ・トレウェローム）に置かれた宮廷と当地のガリア人とかいかなる関係にあったのかを考察する。

しかし、この演説集は、必要な箇所のみ引用されることが多いが、演説としての体裁を有したテキストとして史料そのものに焦点が当てられることは少ない。少なくとも日本人の研究を見る限り、コンスタンティヌスの宗教的政治的動向を辿るために用いられ^①、税制の研究のために引用されたり、あるいは後代の修辞学者ボルドー（古名ブルディガラ）のアウソニウスの前座的な扱いを受けたりする、という程度のものでしかなかった。しかし、こうした研究では当時トリアに置かれた宮廷で展開されたプロパガンダや、弁論家が活動した属州ガリアという地域、なによりその両方が弁論において結び付いている事実を描写していないので、テキストの文脈と社会的背景事情としての文脈、この二つのコンテクストが後景に退いてしまっている。

また、この史料は皇帝という権力者を称えるためのものである故に、積極的な意義を認められてこなかった面もある。この史料に対する一般的なイメージは、「権力者に阿諛追従するインテリたちによって作文された政治的プロパガンダの

書^④」というものである。確かにこの史料はプロパガンダの産物である。だが、R・リースが言うように、権力者のために美文を連ねたものとしてパネギュリクスを倫理的な理由で非難することは、テキストの水面下に潜む緊張や背景事情を見落とすことになる^⑤。レトリックの産物は、まさにレトリックとして読み解かなければならない。筆者は本稿で、トリアに置かれた宮廷に対してガリア人弁論家たちがとったアプローチを明らかにし、ガリアにおいて皇帝権力と属州民とがいかに速やかに結び付くことができたかを叙述する。

まず、第一章において、称賛演説というジャンルの全般的な性格と、『ラテン語称賛演説集』という史料の特徴をまとめる。続く第二章では、本稿で扱う弁論家たちと関係の深いガリアの都市、オートタン（古名アウグストゥム）に焦点を当てて、称賛演説家が地元の利益代弁者としての側面を持つている点を考察する。最後に第三章で、演説集中に登場する皇帝の一人マクシミアヌスをめぐる言説を分析する。この演説集において常に称賛の対象であるディオクレティアヌスやコンスタンティヌス、また、非難の対象としてのみ言及されるマクセンティウスとは異なり、ただ一人マクシミアヌスのみが、ある時点をもつて称賛から非難へとその評価が一変した、特異な例である。同じ人物に対する称賛と非難が同一の史料群の中に並べて残されたことも興味深い、このような特異な事例にこそ当時のガリアが抱えた状況の本質が表れているのではないか。

* 雑誌の略号は *L'année philologique* に従う

Panegyric Latini (以下 *Pan. Lat.* と略) の底本は、R. A. B. Mynors, *XII Panegyric Latini*, (OCT) Oxford, 1964 を使用する。また、仏訳 E. Gallier, *Panegyriques latines*, 3 vols. (Bude) Paris, 1949-55 および、英訳 C. E. V. Nixon and B. S. Rodgers, *In Praise of Later Roman Emperors: the Panegyric Latini*, Berkeley, 1994 を適宜参考にした。各作品の作成年代に関しては細部で理解が分かれるが、本稿では便宜的に上記 E. Gallier のものを採用する。各作品に付す番号は、最初の数字が写本における順番、

括弧内の数字が年代順に古いものから並べた場合の順番である。例えば、*Pan. Lat.* 10(2) は、写本内では十番目に位置し、年代上は二番目に古いものであることを示す。

各史料の略号は *OCD*、および A. H. M. Jones, *The Later Roman Empire* 284-602, Oxford, 1964, p. 1464ff. に従う。

① 例えば、弓削達「マクセンティウスとコンスタンティヌス」、『橋論叢』二八―四（一九五二年）九三―九四頁、同「コンスタンティヌス大帝と太陽宗教の問題」、『史学雑誌』六三―二（一九五四年）六六

一六七頁。

② 弓削達『ローマ帝国の国家と社会』岩波書店、一九六四年、四四〇～四四五頁。

③ 後藤篤子『古代末期のガリア社会』（『ヨーロッパの誕生』（岩波講座世界歴史七）一九九八年）一六三～一六六頁。

④ 保坂高殿『ローマ帝政中期の国家と教会―キリスト教迫害史研究一九三―二一一年』教文館、二〇〇八年、四一頁。

⑤ R. Rees, *Loyers of Loyalty in Latin Panegyric AD289-307*, Oxford, 2002, p.26.

第一章 後期ローマ帝国における称賛演説

（一）称賛演説とは

アリストテレスの分類に従えば、称賛演説は演示弁論に属する。これは「現在ある事柄について称賛もしくは非難をする」ものである^①。本稿で扱う称賛演説にはパネギュリクス (panegyricus) という名がついている。この言葉そのものの起源はギリシア語で全体の集会、祭典を意味する語パネーギュリス (pannygulis) であり、ここから派生した形パネーギュリコス (pannygulos) がラテン語に入ったものである。前三八〇年オリュンピアの祭典で発表するべくイソクラテスが作成した『民族祭典演説』にこのパネーギュリコスという名が冠されている。本来は何らかの祭典に関わる弁論のはずであり、ラテン語で表記される場合でも元はイソクラテスの『民族祭典演説』のことを指していたようだが、いつしかラテン語のパネギュリクスは個人への称賛演説の類一般を意味するものとなった。一世紀の修辞学者クインティリアヌスは『弁論家の教育』でこう述べる。

なぜなら、疑いもなくなんらかの現実に関係しているながら、人々を楽しませることを目標とする演説があるからです。われわれが称賛演説と呼ぶものであり (quales legimus panegyricos)、その全体が演示的な種類の弁論です。こうした弁論においては、より

多くの文飾を用いることが許されており、また、一般に法廷弁論においては隠されねばならない技法を、すべてあらわにするだけでなく、ひけらかすことが許されています—人々が呼び集められているのはこれを聞くためなのです。(2.10.11.)^③

パネギュリクスという語に個人への称賛演説全般という意味が備わった理由は定かではないが、K・ツイーグラーによれば、帝政期に入ると各地の共同体における祭典の場で皇帝に演説を献げることが慣例化したからではないかと推測されている。^④ 実際、『ラテン語称賛演説集』中の作品も、都市ローマの生誕を祝う日や、皇帝の即位記念日を祝す日など、^⑤ ならかの祭典・式典に関わるものが多い。おそらく「祭典の・祭典に関わる」という本来の意味も残っていたのであろう。パネギュリクスという語以外にも称賛演説を指す言葉は存在するが(ラテン語で *laudes*、*laudationes*、ギリシア語で *ἐγκώμιον*、特に皇帝のためのものは *παυλικὸς λόγος*)、^⑦ 本稿ではこれら全てを「称賛演説」という呼称で統一し、ラテン語で *panegyricus* と表記されているものに関しては「パネギュリクス」とする。

さて、史料テキストとしてパネギュリクス・称賛演説が実際に残されているのは、ほとんどが古代末期のものである。代表的な作者としては、ローマ元老院議員シユンマクス、詩人クラウディアヌス、哲学者テミスティオス、そして先にふれたアウソニウスなどの名が挙げられる。S・マッコーマックが指摘するように、古代末期はパネギュリクス作品の「黄金時代」といってよい。称賛演説を作成する機会はかなり頻繁に訪れたと考えられ、現在残っている量よりもはるかに多くの作品が実際には作られ読まれていたと想定される。かのアウグスティヌスも、フランク族出身であるがローマ帝国軍内で軍事長官 (*magister militum*) という高位を占めるに至ったバウトという將軍がコンスルに就任した際(三八五年)、称賛演説を発表したことがあるという。だが、そのアウグスティヌスは『告白』でこうも述べている。

その日、わたしは皇帝に賛辞を述べる用意をしていたが、そのなかでわたしは多くの虚言を語り、虚言を語りながら、その賛辞の

正体を知る人びとの氣に入ろうとした。わたしの心は、このような心遣いであえぎ、身もほそる熱い思いで焼けるほどであったが、
…… (669)^⑩

称賛演説作家たちにも自分が「虚言」を語っているという自覚はおそらくあったのだろう。しかし、たとえそうであっても、称賛演説の発表に名乗りをあげる理由はあった。それは、称賛演説を作成することが出世や栄達に結び付く可能性を持っていたからである。

パネギュリクスつまり称賛演説の発表は、国家や皇帝に関わる祭典の場で行われる。この種の演説が競技会や行列行進といった見世物の提供を伴うセレモニーの必要不可欠な一部分であるという指摘は、かなり以前からなされていた^⑪。そして、セレモニーの場には演説の聴き手である聴衆がいたのである。三二二年にオータンの町を代表してトリアで演説を行った弁論家は、次のように述べている。

……あなた「コンスタンティヌス」の廷臣たちから成る全随行団と帝国のあらゆる機構とがあなたの傍に立ち、ほとんど全ての町から来たあらゆる人々が、あるいは公的に派遣されて、あるいは自分のためにあなたに嘆願しようとしてこの場に居るのだから
…… (Pan. Lat. 5 (8) 2.1.)^⑫

この作品が発表された時、その場には皇帝とその側近たちのみならず、周囲の町からやって来た代表者や嘆願者が居合わせていた。他の称賛演説発表の際にも同様であったという可能性を排除する理由は何もない。従って、皇帝を称える弁論は皇帝とその側近たちだけでなく、帝国に住む住民の一部代表者にも向けられている。皇帝に関わるセレモニーの舞台でパネギュリクスを披露することは、単なるプロパガンダ発信の手段というだけではなく、その皇帝の統治が正当なもの

であることの印であり、聴衆の存在によって証明される統治に対する人々からの一種の承認でもある^⑬。こうした点に注意すれば、たとえ弁論で扱う内容が皇帝にとって都合のよいものに限られるとしても、称賛演説の発表という一種の政治的「儀礼」は皇帝にとって軽視できるものではないことがわかる。そう考えれば、このような言論の担い手がある種の「見返り」を期待できることも理解できるであろう。

三五〇年にアンカラでコンスタンティウス二世に弁論を献げたテミステイオスは、三五五年同帝によりコンスタンティヌス・ノブルの元老院に編入（*adloc.*）された。また、三八九年にローマでテオドシウスにパネギュリクスを献げたバカトゥスは、既に翌三九〇年にはアフリカでプロコンスル職に就いている。もちろん、このような成功例はごく一握りであろうが、こうした成功を求めて弁論家たちは皇帝のための演説に名乗りをあげたのではないか。称賛演説が皇帝の傍近くでの役職や榮譽と関連することも、既に指摘されたところである。パネギュリクスの発表は皇帝の関心を惹きチャンスを手にするための手段の一つであった^⑭。アウグステイヌスが「賛辭の正体を知る人びとの氣に入ろうとした」のもこのような理由からであろう。しかし、このように称賛演説の作成は政治性を帯びているため、作成者に悪影響をもたらす可能性もあったことが、教会史家ソクラテス・スコラスティコスの記事からうかがえる。ソクラテスによると、シユンマクスは篡奪皇帝マグヌス・マクシムスのために称賛演説を作成し発表したために、マクシムスがテオドシウスに敗れた後に危うく大逆罪で告発を受けるところであったという^⑮。その一方で、前述のバカトゥスはマクシムスに対するテオドシウスの勝利を題材に、内戦終了後に称賛演説を作り成功を手にした。このような点はパネギュリクスの政治的な機能と意味を逆によく示しているといえよう。

称賛演説は、一方では確かに皇帝の政策や君主理念を提示する。しかし、それが公的に提示されるとなると、単なる皮相的な言葉の装飾ですますわけにはいかない。そこで示される過剰で装飾過多な表現は、たとえ私たちの目には悪趣味で偽善的なものに見えるとしても、真剣に受け取るべきである。追従の多い冗長なスピーチも、そのようなスピーチが必要

とされるセレモニーの空間も、軍隊や行政機構同様に帝国統治の一部を成すものだからである。称賛演説は、より広く社会的な文脈で捉える必要と同時に、各作品が置かれた個別的な文脈とに照らしていつそう精緻に読み取るべき史料といえよう。このような理解をふまえて、本稿では三〇〇年頃のガリアを対象に、称賛演説の作成が栄達や利益と結び付くこと、そして政治的な文脈で必要とされるものであることを明らかにする。

（二）『ラテン語称賛演説集』

本稿の主たる研究対象となる『ラテン語称賛演説集』とは、散文のラテン語称賛演説計十二篇からなる史料の名称である。写本は一四三三年、イタリアの人文主義者ヨハネス・アウリスバによってマインツで発見された。その構成は以下のようなものである。

- Pan. Lat. 1(1)* : 小プリニウス作、トラヤヌス宛、一〇〇年一月九日、於ローマ
- Pan. Lat. 10(2)* : 作者不明（マメルティヌス作？）^⑩、マクシミアヌス宛、二八九年四月二日、於トリア
- Pan. Lat. 11(3)* : 作者不明（マメルティヌス作？）^⑪、マクシミアヌス宛、二九一年七月二日（？）、於トリア
- Pan. Lat. 8(4)* : 作者不明、コンスタンティウス宛、二九七年三月一日、於トリア
- Pan. Lat. 9(5)* : エウメニウス作、個人名不詳の属州総督宛、二九八年春、於オートン（あるいはリヨン）^⑫
- Pan. Lat. 7(6)* : 作者不明、マクシミアヌスとコンスタンティヌス宛、三〇七年三月二日、於トリア
- Pan. Lat. 6(7)* : 作者不明、コンスタンティヌス宛、三一〇年七月末、於トリア
- Pan. Lat. 5(8)* : 作者不明、コンスタンティヌス宛、三二二年、於トリア
- Pan. Lat. 12(9)* : 作者不明、コンスタンティヌス宛、三二三年、於トリア

Pan. Lat4(10): ナザリウス作、コンスタンティヌス宛、三三二年三月一日、於ローマ
Pan. Lat3(11): クラウディウス・マメルティヌス作、ユリアヌス宛、三六二年一月一日、於コンスタンティノープル
Pan. Lat2(12): パカートウス作、テオドシウス宛、三八九年六―九月、於ローマ

冒頭を飾る小プリニウスの作品を除くと、これら十一篇の演説は三世紀末から四世紀末の間に作成されたものである。パカートウスによる作品が、年代順では最後に、写本中では小プリニウスの次に置かれていることから、パカートウス本人の手で編集されたこのような形で残ったと考えられている^{②③}。また、作者のほとんどはガリア人であると考えられており、ガリア地方と強く結び付いた史料でもある。

先行研究には、この史料のラテン語文芸作品としての性格を扱ったものも多い。皇帝に対する阿諛追従の多さを指摘する研究はあっても、彼らガリア人弁論家のラテン語の質を低く見た文献は管見の限り存在しない^{②④}。代表的なものは、古代末期のガリア人によるラテン文学のひとつとして取り上げたR・ピションである^{②⑤}。他には、共和政期から古代末期までのラテン語散文パネギュリクスの発展と変化を研究したS・マッコーマックの名が挙げられよう^{②⑥}。

次に、これらは皇帝を称える称賛演説であることから、テキストで表明される皇帝像に焦点を当てた研究も目立つ。F・ビュルドーの研究が代表的であろう^{②⑦}。

また、皇帝を称える際に、皇帝の軍事的功績や政治的プロパガンダにも言及されるため、政策とプロパガンダを読み取るという利用法もある。最近では、T・グリューネヴァルトがコンスタンティヌスの政策プロパガンダを研究する際にこの演説集を用いた^{②⑧}。

以上の研究に対して、本稿では、まずこの史料を、文学作品ではなく、政治的な次元で機能したものとして考察したい。同時に、称えられる側の皇帝以上に、皇帝を称える側の弁論家の存在に留意したい。称賛演説は一方通行のプロパガンダ

の発信ではなく、皇帝から臣民、そして臣民から皇帝という双方向的なコミュニケーションともみなしうる。²⁹ 近年の研究では、パネギュリクスの発表を単なる皇帝側の意向の公布として見るのではなく、個々の文脈に即してその意味を理解しようという動向が顕著である。³⁰ これに倣い、本稿では、三〇〇年前後のガリアにおいて、いかなる政治的な言説が作られ、どのような状況においてそれらが機能したのかを考察する。

この史料に残された演説に特徴的なのは、全十二篇中九篇がディオクレティアヌスからコンスタンティヌスの時代にかけて作成されたことである。この時期のガリアはローマ皇帝の宮廷所在地であった。二八五年からはディオクレティアヌスの共治帝マクシミアヌスが、二九三年からはマクシミアヌスの副皇帝コンスタンティウスが、そしてコンスタンティウスが没した三〇六年からはその息子コンスタンティヌスが、トリア宮廷の主となった。ライン川という国境線の防衛や、ブリタニアの篡奪皇帝カラウシウスおよびアレクトゥスへの遠征などは、このトリアを拠点として行われた。軍事・行政の中心地となったトリア、そのトリアに置かれた宮廷と地元のガリア人との間で接触があったことは想像に難くない。続く第二章以下では、称賛演説を媒介にしてガリア人がトリア宮廷に対して行った働きかけと、トリア宮廷とガリア人との結び付きとを考察する。

- ① Arist. *Rh.* 1358b. (アリストテレス『弁論術』戸塚七郎訳、岩波文庫、一九九二年、四五頁)
- ② Cic. *Orat.* 37; *Quint. Inst.* 10.4.4.
- ③ クインティリアヌス『弁論家の教育』森谷宇一・高和弘・渡辺浩司・伊達立晶訳、京都大学学術出版会、二〇〇五年、一七六―一七七頁。
- ④ K. Ziegler, 'Panegyricus', *RE* 18.3, 1949, col. 570.
- ⑤ *Pan. Lat.* 10(2) (四月二二日)。
- ⑥ *Pan. Lat.* 8(4) コンスタンティウスの即位五周年 (quinquennalia) を記念するもの (三月一日) : *Pan. Lat.* 5(8) コンスタンティヌスの即位五周年を祝うもの (七月二五日) : *Pan. Lat.* 4(10) クリスプスとコンスタンティヌス二世の即位五周年を祝うもの (三月一日)。
- ⑦ ラオディケイアの修辞学者メナンドロスの手に残されている、パシロコスロゴスの作成方法を詳述したギリシア語のテキストの存在が知られている (D. A. Russell and N. G. Wilson, *Memoirs of Rhetor.*, Oxford, 1981)。
- ⑧ S. MacCormack, 'Latin Prose Panegyrics', in: T. A. Dorey (ed.), *Empire and Aftermath*, London, 1975, p. 143.
- ⑨ Aug. *c. Lit. Pet.* 3.25.30. アウグスティヌスの称賛演説そのものは現存してゐない。

- ①① アウグスティヌス『告白』上 服部英次郎訳、岩波文庫、一九七六年、一〇六―一〇七頁。以下参照。P. R. L. Brown, *Augustine of Hippo: A Biography*, London, 1967, p.58f.
- ①② R. Pichon, *Les derniers écrits de Panegyricus*, Paris, 1906, p.43.
- ①③totus tibi amicorum tuorum comitatus et omnis imperii apparatus adistat, cum omnes homines omnium fere ciuitatum aut publice missi aut pro se tibi supplices adsint,
- ①④ S. MacCormack, op. cit., p.158f.
- ①⑤ CTh.9.2.4.
- ①⑥ J. A. Straub, *Vom Hertscheideid in der Spätantike*, Stuttgart, 1936, pp.146-159.
- ①⑦ J. Mathews, *Western Aristocracies and Imperial Court A.D.384-425*, Oxford, 1975, p.86.
- ①⑧ Socrates, *Hist. eccl.* 5.14.
- ①⑨ C. Kelly, 'Emperors, Government and Bureaucracy,' *CAH* XIII, 1998, p.138ff.
- ①⑩ これらの作者を「メルティヌスと呼ぶか、またこの二篇の作者は同一であるのかに関しては、写本そのものに由来する問題であり、議論がなされてきた。O・ニクソンがたびB・ロジャーズがこの作者の「メルティヌス」という名を付けた（*op. cit.*, p.76）。両篇の作者の同一性については、差出人の記述のB・ローヌの見解を「完全に支持」（*op. cit.*, pp.193-204）、「同一である可能性は肯定的に定かでない」（*op. cit.*）*Pan. Lat.*1(3)の作者はそれ以前の作品である *Pan. Lat.*10(2)を知っているように。
- ①⑪ かいてO・ゼークによれば、この史料中の不明著者は全くオムニウスと同一個人の作であるという説が出た（e.g. O. Seeck, 'Eumenius,' *RE* 6.1, 1907, coll.1105-14）。しかし、この主張はトキ

ストの証言そのものと各パネギリクスの古典作品からの引用の傾向を調べたA・クロマンにより既に退けられており（A. Klötz, *Studien zu den Panegyrici Latini*, *RM* 66, 1911, pp.513-72）^{①②}。現在では、差出人の「メルティヌス」を待たないで、本稿では、この不明著者は別個の人物として扱っているようにする。

①② オータンにおける学校の再建におけるこの作品は、当のオートンで読まれたと考えられてきたが、B・ロジャーズによりリヨンとオートンの間で発表された可能性が指摘された（B. S. Rodgers, 'Eumenius of Augustodunum,' *AmSt* 20, 1989, pp.249-66）。

①③ ヘルメー出身か否かは見解が分かれるものの、ヘルメーと縁のあるこのガリア人バカートウスは、アウニウスの友人であり、既述したように、パネギリクス発表後に成功を手にした弁論家である（E. Galletier, *op. cit.*, III pp.48-51; A. H. M. Jones, J. R. Martin-dale and J. Morris, *The Prosopography of the Later Roman Empire I A.D.260-395*, Cambridge, 1971, p.272 (以下「PLRE」）; C. E. V. Nixon and B. S. Rodgers, *op. cit.*, pp.437-447）。

①④ R. Pichon, *op. cit.*, pp.285-91.

①⑤ そのテキストから、彼らはアウニウスやケロ、ウェルギリウス、ヤベカらの作品に通じるといふことがわかる（F. Burdeau, 'L'empereur d'après les Panegyriques Latins', in: F. Burdeau, N. Charbonnel et M. Humbert (eds.), *Aspects de l'empire romain*, Paris, 1964, p.4）。

①⑥ R. Pichon, *op. cit.*

①⑦ S. MacCormack, op. cit. (すなわち同内容の文献がある。Ibid., 'Latin Prose Panegyrics: Tradition and Discontinuity in the Later Roman Empire,' *REAug* 22, 1976, pp.29-76.)

①⑧ F. Burdeau, op. cit.

②③ T. Grünewald, *Constantinus Maximus Augustus: Herrschaftspropaganda in der zeitgenössischen Überlieferung*, Stuttgart, 1990.

②④ G. Sabbah, 'De la Rhetorique à la communication politique : les Panégyriques latins', *BAGB* 4, 1984, p. 377f. ただし「の研究」

本稿のようなガリアを基盤とした政治的プロパガンダを意識したものはなく。

②⑤ R. Rees, *op. cit.*, p. 23ff.

第二章 オータンの弁論家とトリア宮廷

後三〇〇年前後頃に作成された称賛演説九篇の内、二九七年、二九八年、三一〇年、三二二年の四篇の作者は、自らがアエドゥイ族の町（*civitas Aediorum*）オートタンの出身であることを明らかにしている。^①そして彼らは、オートタンの町が「ローマ人の兄弟」という名を得たことを、アエドゥイ族がガリア人の中で最初に元老院から「ローマ人の兄弟」と名付けられたことを誇っている。^②三二二年のオートタン人弁論家は、アルウェルニ族とセクアニ族がゲルマン人を援軍として呼び入れた時に、アエドゥイ族の首長ディウイキアクスがローマ元老院へ赴き事態を報告した故事に言及し、カエサルによるガリア征服の時代にアエドゥイ族がローマ人に協力的だったと誇る。^④

丘砦ビブラクテからオートタンへと移ったアエドゥイ族は、早い時期からその町オートタンに長大な周壁、劇場、円形闘技場を有し、帝政期に繁栄を享受したが、三世紀の内乱期にオートタンは深刻な荒廃を被ることになった。^⑤二六〇年から、ガリア、ブリタニア、ヒスパニアはローマ帝国から離反しいわゆる「分離帝国」を形成するに至った。^⑥しかし、オートタンはこの「分離帝国」に対して反旗を翻し、イタリア側の皇帝クラウディウス・ゴティクスに救援を求めた。この事件について三二二年の弁論家はいくらかの情報を提供してくれる。二六九／七〇年、この弁論家がまだ子供だった頃、オートタンはクラウディウス帝にガリア奪還を促したが、逆にガリア分離帝国側の皇帝テトリクスによって包囲を受け、七ヶ月に及ぶ籠城の末に制圧されたという。^⑦この包囲攻撃の後、オートタンの名士たちは処分を受け、ある者は財産没収の上オートタンか

ら追放された。この時追放されたオートン人の一人が、後のボルドーのアウソニウスの母方の祖父に当たる人物、カエキリウス・アルギキウス・アルボリウスである。^⑧この反乱事件により引き起こされたオートンの荒廃は深刻であった。この荒廃から故郷を復興させるべく、オートン出身の弁論家たちは再建事業の誘致をトリア宮廷に働きかけ始める。

少なくとも、コンスタンティウスの時代からオートンの再建事業が着手されたことがテキストから確認される。コンスタンティウスによるブリタニアの奪還を称える二九七年の弁論家は、このブリタニア遠征の勝利の機会に、ブリタニアの職人たちの手で住居、公共建築物、神殿といったオートンの建築物が修理・再建されたことを伝えている。^⑨二九八年のエウメニウスは、公的建造物だけでなく個人の住居の再建のためにも資金が提供されたこと、労働を担う職人がブリタニアから派遣されたこと、ガリア中の名望家層から新たな住民が送り込まれたこと、そして冬営中の兵士たちによって水道設備が修繕されていることを伝える。^⑩三二二年の演説家も、コンスタンティウスの時代に浴場が再建され、住民の補充がなされたと伝えている。^⑪そのコンスタンティウスの息子であるコンスタンティヌスに対しても、三一〇年の弁論家はオートンへの援助を求めている。^⑫このように、オートン出身の弁論家たちは、称賛演説発表の場において自分たちの故郷の利害を代表しているのであるが、実は彼らは宮廷の官吏としての経歴を持つ人物たちであった。

二九七年の弁論家は学校の教師でもあったが、コンスタンティウスの推薦によりマクシミアヌスに演説を披露する機会を得、その後宮廷内でなんらかの職（書記か）に就いたという。^⑬この人物とおそらく同じ頃、宮廷内で重要な職に就いていたのがエウメニウスである。エウメニウスの手による二九八年の演説 *Pan. Lat. 9(8)* は、『ラテン語称賛演説集』中で唯一皇帝に宛てられたものではない。作中、*vir perfectissime* と呼びかけられる、名称不明の属州総督が直接の聴き手である。^⑭しかし、この総督に対して称賛の言葉が贈られるわけではなく、その場にはいない皇帝への称賛演説という形を取りながら、エウメニウスはオートンにある学校の再建を申し出る。「かつてこの上なく美しい建物と勉学研究の豊富さの故に称賛され高名であったあのマエニアナ学校が、他の建物や神殿が修復されているのと同じように再建されることを

……私は求めます。」^⑩

このエウメニウスは、元は宮廷の起草局長官（magister memoriae）^⑪である。本来、エウメニウスは自分の息子をこの学校の教師に推薦しようとしていたのであるが、代わりにコンスタンティウスからエウメニウス本人がその学校の長になるように命を受けた。^⑫その際、起草局長官時代の給金三十万セステルティウスを倍の六十万セステルティウスに増額され、^⑬また起草局長官という宮廷での顕職に伴う特権が修辞学の教師となった後も維持されることが保証されたという。^⑭この特権とは、宮廷官吏に認められるもので、都市参事会での行政・財務上の雑多な奉仕や負担からの免除を含むものだろう。^⑮このような特権の保証と教職への任命を告げる宮廷から届いた以下のような書簡を、エウメニウスは引用し演説の中に組み込んでいた。

そこで、教師の死によって失われたと思われるこの学校に対して、我々が公務を執り行ううちにその雄弁と性格の謹厳さとを知るにいたったので、特におまえをその長に任せねばならなかった。それ故、おまえの顕職の特権を維持した上で我々は命じる。おまえは雄弁術の職を再開し、我々がかつての栄光を取り戻させたことをおまえも知らないではない上述の町において、より善き生に専心するよう青年らの精神を教化すべし、と。この職務のためにおまえのかつての役職が名誉の点で何らか傷つくと考えてはならない。誉ある職業は威信を減ばすよりもむしろ威信の全体を飾り立てるのだから。そして最後に、我々の寛大さもまたおまえの業績に配慮しているのだとおまえに理解できるように、おまえは国家の資力から六十万セステルティウスで給金を得ると我々は定める。我らの親愛なるエウメニウスよ、健やかであれ。（*Pan. Lat.* 9(5) 14.3-5.）^⑯

エウメニウスはこの六十万セステルティウスの給金を用いてマエニアナ学校を再建したいと訴える。^⑰エウメニウスを駆り立てるのは故郷への愛であるという。エウメニウスは元宮廷官吏としての名誉と自分の出身地への自発的な奉仕と

を誇示している。エウメニウスがかつて就いていた起草局長官は、書記局 (officia / scrinia) を統轄する。ほぼ同時期、東方で同じ起草局長官職に就いていたシコリウス・プロプスは二九八年にペルシアとの和平交渉にあたっており、この職は法・行政・外交といった広範かつ重要な職務を担うものであるといえる。エウメニウスがかつて宮廷内で占めていた位置は決して軽いものではない。

以上のような、皇帝権力との地理的な近接を背景として四分治制の時代に培われたトリア宮廷とオータンとの結び付きは、コンスタンティヌスの時代に入ってもまだ維持されていたことが三一〇年の演説と三一二年の演説からわかる。

このコンスタンティヌスに演説を献げる三一〇年のオータン人弁論家も、その詳細は不明であるものの、かつて宮廷で複数の役職に就いたことがあるという。^{②⑦}そして、この人物の子供の内の一人は、「既に国庫にまつわる重要な任務の遂行を担当している。」^{②⑧}「^{②⑨}」という国庫にまつわる職務とは国庫弁護官 (advocatus fisci) だと考えられている。この職はハドリアヌスによって創設された上級法務官吏で、各属州において私人に対し国庫の利害を代弁するものである。^{②⑩}F・ミラーは、カエリウス・サトゥルニヌスという人物がイタリアでの国庫弁護官職から経歴を始め、最終的には元老院入りを果たしガリアの道長官 (praefectus praetorio) にまで登り詰めた事例を引き合いに出し、国庫弁護官という職が皇帝の側近の座に結び付き得ることを指摘している。^{②⑪}また、アウソニウスの娘の夫であるウアレリウス・ラティヌス・エウロミウスなる人物が、国庫弁護官から始めて後にダルマティアの属州総督になっている例もある。^{②⑫}この弁論家の息子がどれほどの出世を遂げることができたのかは不明であるが、この息子を皇帝コンスタンティヌスに推薦している父親は、自分の息子を将来性のある役職に就けることには成功したのではないだろうか。そして、この弁論家が称賛演説発表の機会に推薦するのは自分の息子だけではない。続けてこの弁論家は言う。

私は全ての子供たちについて語ったのですが、皇帝「コンスタンティヌス」よ、それでも自負は広範にわたります。というのも、

私が授かった五人の子供たちのほかに、フォルムの後見人や宮廷での職務にひきたてた、あたかも自分の子供のように思っている者たちがいるのです。確かに、世に知られぬことはない多くの川が私から流れ出しており、私の多くの門弟たちもまたあなたの属州を管理しています。私は彼らの成功を喜んでいすし、全員の名誉を我が事のように思っています。もし仮に今日の私の演説が私の期待を下回るものになったとしても、彼らに関しては賛意を得たと私は確信しています。（*Pan. Lat.* 6(7) 23.2.）^{②③}

このオータン出身で元官吏の弁論家は、弁護人や宮廷官吏、属州行政に携わる役人となった多くの弟子のことを誇る。更にこのパネギュリクスにおいて、コンスタンティヌスにオータンの町を直接訪れて公共の場や神殿を再建して欲しいと訴えるのである。^{②④} コンスタンティヌスのオータン来訪が実現したことは、三二二年の称賛演説から判明する。

三二二年の弁論家は、コンスタンティヌスに感謝を述べるべく、故郷オータンのために使者の役割を引き受けた。^{②⑤} オータンの町は、新しいケンススによる税査定の莫大さのために衰弱し、城壁の倒壊以上に力の疲労によって打ち沈んでいた。^{②⑥} ここでいう新しいケンススとは、三〇六年のガレリウスによるケンススのことを指すと考えられる。^{②⑦} その結果、耕作地は放棄され沼沢地や湿地に姿を変え、葡萄畑までもが荒れ果てたという。^{②⑧} オータンの窮状を知ったコンスタンティヌスは訪問を決意し、オータンを訪れた同帝を町の門がまるで抱擁するかのように迎え入れた。^{②⑨} オータン滞在中のコンスタンティヌスのために、町の人々はコレギアの旗と神像、そして明るい旋律の楽器を持ち出して皇帝が通る道を飾り立てたという。^{③①} そして、この弁論家を含むオータンの都市参事会と面会したコンスタンティヌスにより、次のような二つの税負担の軽減が救済措置として認められた。

一つは負担する税の査定額を、七〇〇〇カピタ免除して二五〇〇〇カピタに減免したこと。^{③②} もう一つは、以前のケンスス以来来たっていた五年分の税の内、未払い分の支払いを免除したこと、である。^{③③} こうでのカピタ（*capita*）が何を意味するのかに関しては意見が分かれるが、^{③④} 税を課される人の頭数ではなく抽象的な税額査定上の単位とみなし、耕作地への

言及が多いことから単に人頭税のみではなく土地税をも含んだものと考えたい。^⑬

このように、三一〇年の演説の時点でなされたコンスタンティヌスへのオータン来訪の申し出は実現され、三一二年の演説でその訪問時に取り決められた減税措置への公的な感謝がなされることになった。オータンとトリア宮廷との結び付きはこの頃までは確かに機能していたのである。F・ミラーが言うには、修辭学の素養と皇帝の傍近くでの官吏としての職務とのリンクが最も完全かつ最も明確に表れているのは、三世紀末から四世紀初頭にかけてのこれらガリアの称賛演説においてなのである。^⑭しかし、これ以後、オータン出身者たちの活動の痕跡は消え、史料から姿を消してしまう。ユリアヌスが副皇帝としてガリアへ赴任した頃を記述するアンミアヌス・マルケリヌスには、オータンの町はその周壁は長大であるが既に老朽化している、という程度の認識しかない。^⑮オータン出身の弁論家たちはどこへいったのか。彼らにどのような状況の変化が訪れたのだろうか。

ガリア出身の弁論家にとって活動の機会そのものが絶たれたわけではない。ボルドー出身のエクススベリウスは、コンスタンティヌスの異母兄弟であるダルマティウスの息子たちの教育係になり、後にヒスパニアで属州総督に就くことができた。^⑯また、アウソニウスの母方の伯父、アエミリウス・マグヌス・アルボリウスは、二七〇年にオータンから追放された一族の一人であるが、コンスタンティヌスの異母兄弟と親交を得て、ガリア・ナルボネンシス属州の総督に就き、後にはコンスタンティノーブルへ移り、コンスタンティヌスの息子で副皇帝となった人物（三人の内の誰なのかは判然としない）の教育係となった。^⑰しかし、この二人について情報をもたらずのは、後のボルドーのアウソニウスである。コンスタンティヌス治世後半には宮廷とオータンとのリンクは消え、ボルドーを中心とする南ガリアへと既に比重が移っているように見える。コンスタンティヌスがガリアから離れて東方へと関心を移していくと、その息子クリスプスが副皇帝として西方を担当し、三一八年からトリアに宮廷を構えていた。^⑱また、クリスプスが父親によって処刑されてからは、代わりにコンスタンティヌス二世が副皇帝としてガリアのトリアへ向かった。^⑲こうして、トリア宮廷にはコンスタンティヌスの息子た

ちが続けて滞在していたにもかかわらず、トリア宮廷とオートンとのコネクションが再形成された形跡はない。これはどうしたことなのだろう。

まず、この当時の政治的な状況を考えてみよう。ディオクレティアヌスの時代には、元老院身分の者は帝国運営からほとんど締め出されていたことが知られている。^{⑤④} デイオクレティアヌスは騎士身分の者を多く登用したのである。ディオクレティアヌスからコンスタンティヌス初期までの頃のガリアにおける総督職就任者はほとんど知られていないが、ガリア属州の統治に元老院身分の者を使った形跡はない。^{⑤⑤} 四分治制時代には、多くのイリュリア地方出身者が帝国運営に進出したが、^{⑤⑥} ガリア方面でどの程度イリュリア人が活動していたのかは明瞭ではない。^{⑤⑦} 確実なのはマクシミアヌスやコンスタンティウスといった皇帝本人程度である。だが、おそらくガリアでの行政運営には地元ガリアの人間が組み込まれていたのではない。その名前が伝わるのは起草局長官のエウメニウスのみであるとはいえ、称賛演説作家たちの証言から判断して、多くのガリア人が宮廷官吏となったり、あるいは属州運営に関与したりした可能性は高い。元老院身分の者がガリアで登用されたとは考えにくいし、外部からやってきた軍隊のイリュリア人だけで全てのポストが埋まったとも思えない。^{⑤⑧} デイオクレティアヌスの時代には、属州の再分割によって行政上のポストは増える傾向があったはずだからである。そこに修辭学を修めたガリア人が採用されたという推測は的外れではあるまい。残されたパネギュリクスの内、最初期のものはマクシミアヌスに献げられた二八九年の作品であり、マクシミアヌスのガリア到来よりおよそ四年後である。おそらくマクシミアヌスがガリアにやって来た頃から既にトリア宮廷との結び付きは形成され始め、コンスタンティウスの時代にはオートン出身者が存在感を増した。そして、コンスタンティヌスはこの人的ネットワークをそのまま受け継いだのではなかろうか。元来東方で軍務に就いていたコンスタンティヌスには、即位当初コンスタンティウスの息子であるという以外に特に皇帝としての正当性の根拠はなく、まだ目立った軍功もなければ、彼自身の手による人脈網、廷臣団も存在していなかったであろう。それに、ガリアのコンスタンティヌスとイタリアのマクセンティウスとは当時対立関係にあり、こ

の時点においてガリア・イタリア間の政治的次元での交通は遮断されていた。従って、コンスタンティヌスにとって新たな人材のリクルート源は必然的に彼の人事権の及ぶ地域のみに限られる。このように考えれば、マクセンティウスを排除する三二二年一〇月までの時期、ガリアにおける行政運営はそれまでと同じような種類の人々によってなされていたと考えられる。ではこの結び付きが途切れる要因とはなんであったのか。

一つはコンスタンティヌスの動向にあるといえよう。実質的にディオクレティアヌスの下僚皇帝だったマクシミアヌスや、四人の皇帝の内の一人でしかなく即位後ほとんどガリアから離れなかった父コンスタンティウスとは違い、最終的にコンスタンティヌスは全帝国を統べる最高主権者となった。統治領域が広がるにつれて、その関心がガリアから離れていくのも不思議ではない。オートン人たちにも、コンスタンティヌスとともに東方へ活動の場を移すという選択肢があったのかもしれないが、実際にそうした形跡はない。称賛演説の内容がガリアに集中していることからすると、オートンを離れるには彼らの土着性が強すぎたのかもしれない。^⑤そして、考えられるもう一つの原因は、次章で述べる彼らと前政権との強い結び付きである。

- ① *Pan. Lat.* 8 (4) 21.2; 9 (5) 2.1, 3.4, 14.1; 6 (7) 22.3f; 5 (8) 1.1f.
- ② *Pan. Lat.* 8 (4) 21.2; 9 (5) 4.1; 6 (7) 22.4.
- ③ *Pan. Lat.* 5 (8) 2.4.
- ④ *Pan. Lat.* 5 (8) 3.2-4. cf. *Caes. B. Gall.* 6.12.
- ⑤ J. F. Drinkwater, *Roman Gaul: the Three Provinces, 58BC-AD260*, London: Canberrra, 1983, pp.131, 189f.
- ⑥ J. F. Drinkwater, *The Gallic Empire. Separatism and Continuity in the North-Western Provinces of the Roman Empire A.D.260-274*, Stuttgart, 1987, p.24ff.
- ⑦ *Pan. Lat.* 5 (8) 4.2f.
- ⑧ *Auson. Parentalia* 3.
- ⑨ *Pan. Lat.* 8(4) 21.2.
- ⑩ *Pan. Lat.* 9(5) 4.2f.
- ⑪ *Pan. Lat.* 5(8) 4.4.
- ⑫ *Pan. Lat.* 6(7) 22.4.
- ⑬ *Pan. Lat.* 8(4) 1.2ff.
- ⑭ E.g. *Pan. Lat.* 9(5) 1.1. *vir perfectissimus* とは「騎士身分の人間に与えられる称号であり、近衛隊長官に次いで高位の属州総督クラスの人間が帯びるものでもある」(A. H. M. Jones, *op. cit.*, pp.44f., 48)。
- ⑮ テキスト中では「*scholae Maenianae*」として *illa Maeniana* という形で表記され、「おそらく建物自体の様式に由来すると考えられているが、このオートンの修辭学の学校を、本稿では便宜的にマエニアナ

- 学校に表記する (C. E. V. Nixon and B. S. Rodgers, *op. cit.*, p.152 n.5)°
- ⑤ *Pan. Lat.* 9(5) 3.2. ...postulo...ut Maenianae illae scholae quondam pulcherrimo opere et studiorum frequentia celebres et iulustres iuxta cetera quae instantur opera ac templa reparantur.
- ⑥ 後藤篤子氏の訳語を採用する (前掲「なごるこ」註③)° 正訓読み「官房長官」という訳語を使っているが (前掲「なごるこ」註①「ペンヤンヤーウニスウコハンスタンヤーニス」九三頁)° 現在ではこの訳語では *magister officiorum* のほうが誤用であると思われる°
- ⑦ *Pan. Lat.* 9(5) 6.2.
- ⑧ *Ibid.*, 11.2.
- ⑨ *Ibid.*, 15.4.
- ⑩ A. H. M. Jones, *op. cit.*, p.586; C.E.V. Nixon and B.S. Rodgers, *op. cit.*, p.165 n.56.
- ⑪ Vade auditorio huic, quod videtur interitu praeceptoris orbatum, te potissimum praeficere debimus, cuius eloquentiam et gratitatem morum ex actus nostri habemus administratione competam. Salvo igitur privilegio dignitatis tuae hortamur ut professionem oratoriam repeas atque in supra dicta ciuitate, quam non ignoras nos ad pristinam gloriam reformare, ad uitae melioris studium adulescentium excolas mentes, nec putes hoc munere ante partis aliquid tuis honoribus derogari, cum honesta professio ornet potius omnem quam destruat dignitatem. Denique etiam salarium te in sescentis milibus nummum ex rei publicae viribus consequi volumus, ut intellegas meritis tuis etiam nostram consulere clementiam. Vale, Eumeni carissime nobis.
- ⑫ *Pan. Lat.* 9(5) 11.3, 16.3.
- ⑬ *Ibid.*, 16.5.
- ⑭ *PLRE I* p.740 (P7).
- ⑮ A. H. M. Jones, *op. cit.*, pp.50f., 367f.
- ⑯ *Pan. Lat.* 6(7) 23.1.
- ⑰ *Ibid.*, ...iam summa fisci patrocina tractantem...
- ⑱ E. Galletier, *op. cit.*, II p.74 n.1; C.E.V. Nixon and B.S. Rodgers, *op. cit.*, p.253 n.102.
- ⑲ F. Millar, *The Emperor in the Roman World*, London, 1977, p.96f.
- ⑳ *Auson. Parentalia* 14.
- ㉑ Ceterum quod de omnibus liberis dixi, lata est, imperator, ambitio, praeter illos enim quinque quos genui, etiam illos quasi meos numero quos prouexi ad tutelam fori, ad officia palatii. Multi quippe ex me ritui non ignobiles fluunt, multi sectatores mei etiam provincias tuas administrant. Quorum successibus laetor omniumque honorem pro meo duco et, si forte hodie infra expectationem mei dixero, in illis me confido placuisse.
- ㉒ *Pan. Lat.* 6(7) 22.1-7.
- ㉓ *Pan. Lat.* 5(8) 1.2.
- ㉔ *Ibid.*, 5.4.
- ㉕ Lactant. *De mort. pers.* 23.2.
- ㉖ *Pan. Lat.* 5(8) 6.1-8.
- ㉗ *Ibid.*, 7.4, 6.
- ㉘ *Ibid.*, 8.4.
- ㉙ *Ibid.*, 11.1, 3.
- ㉚ *Ibid.*, 13.1.
- ㉛ 例へば A・H・M・シーモンズは「この capita を課税可能な人口の数である」(*op. cit.*, p.1040f., n.15)° 一方「この capita を

土地と人に課された税の査定額を示す単位として理解する研究者がある (e.g. A. Piganiol, 'La capitation de Diocétien,' *RH* 176, 1935, pp.1-13 ; A. Déléage, *La capitation du Bas-Empire*, Mâcon, 1945, p.208ff.; R. MacMullen, *Roman Government's Response to Crisis*, New Haven, 1976, p.137ff.)。また「前達氏は、課税人口だけを含まずのび、地租から切り離された人頭税のことだと考えている (前掲書、四四〇～四四二頁)。

- ⑬ *Pan. Lat.* 5(8) 6.1.8, 7.2, 14.3. 以下を参照。C. E. V. Nixon and B. S. Rodgers, *op. cit.*, p.257ff.
- ⑭ F. Millar, *op. cit.*, p.83ff.
- ⑮ *Amm. Marc.* 16.2.1. 以下を参照。R. MacMullen, *Corruption and the Decline of Rome*, New Haven, 1988, p.22.
- ⑯ *Auson. Prof. Burd.* 17.
- ⑰ *Auson. Parentalia* 3, *Prof. Burd.* 16.
- ⑱ T. D. Barnes, *The New Empire of Diocletian and Constantine*, Cambridge, MS., 1982, p.83.
- ⑲ *Ibid.*, p.84.

第三章 マクシミアヌス像の変遷に見るガリアにおけるプロパガンダの展開

この章では、マクシミアヌスという皇帝の人物像とコンスタンティヌスとの関係の変遷を通して、四世紀初頭におけるプロパガンダの形成と発信、そしてその変遷を辿り、トリア宮廷とガリア人弁論家との関連を政治情勢の側面から考察する。

皇帝ディオクレティアヌスの同郷人にして戦友のマクシミアヌスは、二八五年ディオクレティアヌスにより副皇帝とし

- ⑳ M. T. W. Arnheim, *The Senatorial Aristocracy in the Later Roman Empire*, Oxford, 1972, pp.5, 39ff.

- ㉑ *PLRE I* p.1090f.

- ㉒ 井上文則「後期ローマ帝国形成期におけるイリュリア人」『西洋史学』二〇二(二〇〇一年)。

- ㉓ 二九四年におそらく属州セクシアニアの総督だったアウレリウス・プロクルスは、イリュリア地方出身者だった可能性がある (*PLRE I* p.747 (P7), T. D. Barnes, *op. cit.*, p.161。井上文則「前掲論文」三一大頁)。

- ㉔ A. H. M. Jones, *op. cit.*, p.42ff. 実際にはどのような人物が新しいポストを埋めたのかはよくわからなく (*Ibid.*, p.49)。

- ㉕ J・マシューズによると、ガリア人は帝国の政策に関与すること、積極的ではなく、三〇〇年頃に見られる例外的な積極性は四分治制時代に宮廷がガリアに常駐したためであるという (*op. cit.*, pp.80, 350f.)。同様の見解については R. van Dam, *Leadership and Community in Late Antique Gaul*, Berkeley, 1985, pp.12-15 を参照。

てガリアへと派遣された。^① バガウダエと呼ばれるガリアでの反乱の鎮圧に成功すると、翌二八六年正皇帝へと昇格し、トリアに宮廷を構え、異民族との戦いに奔走する。ブリタニアと低地地方を奪取した僭称皇帝カラウシウスへの攻撃は不発に終わったようだが、ガリアにおけるローマ皇帝のプレゼンスは重要であった。二八九年の弁論家は、マクシミアヌスがガリア属州を光で照らしますようにと願う。^② 二九三年に四分治制が成立し、副皇帝コンスタンティウスがガリアを担当するようになると、マクシミアヌスはイタリアのミラノを主な宮廷所在地にし、アフリカの治安を維持し、またコンスタンティウスがブリタニアに遠征する際にはその代わりにライン川防衛線にらみを利かせた。^③ そして、三〇五年五月一日デイオクレティアヌスと同時に退位し、イタリアでの引退生活に入った。マクシミアヌスが再び政治の舞台に登るのは、三〇六年に息子マクセンティウスがローマで皇帝に宣せられてからのことになる。以下、マクシミアヌス像の変遷を三段階に分けて辿る。

（一）三〇七年…祝婚の演説における再登位の弁明

三〇五年五月一日をもってデイオクレティアヌスとともに退位したマクシミアヌスは、三〇六年一〇月二八日にその息子マクセンティウスがローマで皇帝に宣せられると、マクセンティウスの呼びかけに応じて再度皇帝として即位した。^④ デイオクレティアヌスに代わって東方正皇帝となっていたガレリウスは、この父子の皇帝位を認めず、ローマ帝国は皇帝同士の内戦に突入した。ガレリウスの意を受けた当時の西方正皇帝セウエルスによるイタリア侵攻を防いだ後、ガレリウスによる再度のイタリア攻撃に備えるため、マクシミアヌスはガリアへ向かい、自分の娘ファウスタをコンスタンティウスと結婚させた。^⑤ この二人の結婚の場で読まれたのが三〇七年のパネギュリクスである。再び皇帝として活動を始めたマクシミアヌスをこの演説はどのように描いているのか。

マクセンティウスの登位に始まるイタリアでの一連の経過は省略されている。弁論家は、マクシミアヌスが帝位を退い

のために、イタリア全土とローマは支えにしていたマクシミアヌスの右手を取り去られて、おのき倒れ伏してしまつたと語る。だが、マクシミアヌスの帰還によつて全ては回復したのだから、不幸な出来事をわざわざ思い出す必要はないと、イタリアでのマクセンティウスの蜂起やセウエルスとの内戦への言及は避けられている。^⑥この弁論家は、コンスタンティヌスがファウスタとの婚姻によりマクシミアヌスの義理の息子となつたことを称える一方で、実の息子マクセンティウスのことは完全に視野の外に置いているのである。

マクシミアヌスの帝位復帰は、マクセンティウスの誘いによるものではなく、都市ローマそのものの願いであると、この弁論家は擬人化した都市ローマに語らせる。自分「ローマ」がかき乱され、マクシミアヌスが私人として生きるのを、自分からは自由が奪われ、マクシミアヌスは休息を享受しているのを、私はいつまで耐えればよいのか。マクシミアヌスは、以前は兄弟「ディオクレティアヌス」から求められて命令を下した、今は母「都市ローマ」の命によつて再び指揮権を担うのだ、^⑦と。マクシミアヌスは、神聖なる母、都市ローマの命令に抗うことはできないので、本意ではないがそれに従い、国家の夜警と管理のために復帰した、とされる。^⑧

また、ディオクレティアヌスの退位は、年齢に圧迫され健康も衰えていたため正当なものだが、マクシミアヌスは今でも体力が損なわれることもなく頑健であるのだから、私人としての生活に戻るのはふさわしくなかった、とも述べる。^⑨マクシミアヌスの帝位復帰は、ローマが要求するやむを得ぬもの、マクシミアヌスの功績と健康を考えれば当然のこととされ、マクセンティウスやガレリウスといった直接の関係者や敵対者は完全に無視された状態で弁明されている。

この作品が献げられたもう一人の人物、それが「生まれ来る皇帝コンスタンティヌス（Constantinus oriens imperator）」である。^⑩三〇六年七月二五日、彼の父コンスタンティウスがヨークで没するとともに父の軍隊によつて皇帝に宣せられたコンスタンティヌスは、当初副皇帝の地位に甘んじていたが、この結婚の時点でマクシミアヌスにより正皇帝の地位を認められた。^⑪しかしそれは、あくまでも義父マクシミアヌスによるものである。まだ皇帝として即位して日の浅いコンスタ

ンティヌスにとって、その正当性を補強するものは、一つは亡き父コンスタンティウスの名声であり、もう一つは妻ファウスタの父であるマクシミアヌスの権威であった。この演説では、コンスタンティヌスが父コンスタンティウスに似ているという点が強調される。自然の女神ナートウーラが父親の容貌をコンスタンティヌスの顔に刻印した。コンスタンティヌスには父の容貌だけでなく、節制、勇氣、公正、そして聡明さまでもが現れている、と。⑬

⑭

息子を、婿養子にしたことにもなる。こうして、皇帝の家系の結び付きが強調されるのである。⑮

また、コンスタンティヌスとファウスタの結婚も、マクシミアヌスにより以前から決められていたのだとこの弁論家は述べる。アキイレイアの宮殿にはまだ少女であるファウスタが少年コンスタンティヌスに兜を与えるところを描いた肖像画があったともいう。⑯

結局、コンスタンティヌスを自分の家系に受け入れることも、マクシミアヌスの采配に帰されている。

この称賛演説において最も主要な位置を占めるのはやはりマクシミアヌスである。⑰

尊嚴の点で、年長のマクシミアヌスが勝り、年少のコンスタンティヌスは後に続く。父であるマクシミアヌスは、帝国の頂点から世界を見渡し、人間世界の事柄を定め、戦争を遂行するべく命令を与え、和平を調停するべく条項を定めるのがふさわしい。若者コンスタンティヌスは、ローマ帝国の国境線を越えて進軍し、度重なる勝利の月桂冠を義父の下へ送り、指示を求め、成果を報告するのがふさわしい。⑱

⑲

マクシミアヌスの主導の下、「二人が心一つにして決定を下し、両者が二人分の兵力を有するであろう」、このように二人の皇帝の関係は提示される。

（二）三一〇年…マクシミアヌスの反乱をめぐる言説

三〇八年十一月のカルヌントウム会議の後、再度退位しガリアに戻っていたマクシミアヌスは三一〇年の春コンスタンティヌスに対して反乱を起こした。この称賛演説の発表は、マクシミアヌスの反乱が収束した直後であると考えられるた

め、この反乱についての最初期の記述とみなすことができる。つまりこの作品は、マクシミアヌスがコンスタンティヌスに反乱を起こし、失敗して死んだその直後のガリアの空気を反映していると考えられる。しかも、この作品は前章で述べた、オートン出身で国庫弁護官の息子を持ち大勢の弟子の成功を誇っている人物のものと同一の作品である。

この演説において、コンスタンティヌスの祖先が三世紀の軍人皇帝クラウディウス・ゴティクスであることが表明される。「かの神君クラウディウスから父祖の血縁があなた『コンスタンティヌス』へと注いでいる。」^{②①}コンスタンティヌスの家系をクラウディウス・ゴティクスに結び付ける記述は、この史料が最初である。『ヒストリア・アウグスタ』には、コンスタンティウスをクラウディウス・ゴティクスの甥と述べる箇所があるが、^{②②}同書が本当にコンスタンティウスの存命中に書かれたと考える理由はなく、コンスタンティヌス一族の出自伝説が膾炙して後の記述である可能性が高い。マクシミアヌスの反乱とその死の直後という段階で、クラウディウス・ゴティクスの血統が主張されているのはおそらく偶然ではない。これは、コンスタンティヌスとマクシミアヌスとの間に距離を設けるための試みであろう。

上述の三〇七年の称賛演説では、コンスタンティヌスと並んで、むしろそれ以上に称賛の対象だったマクシミアヌスが、この三一〇年の演説では非難すべき対象へと急変している。おそらく、マクシミアヌスの反乱とその死は当時のトリア宮廷に大きな動揺をもたらしただろう。マクシミアヌスの娘ファウスタがコンスタンティヌスの妻である事実は動かしがたく、イタリアにはマクシミアヌスの実の息子であるマクセンティウスがいる。なによりマクシミアヌスは二八五年からコンスタンティウスが副皇帝になった二九三年までガリアに滞在していた。マクシミアヌスは以前からの権威をガリア人の間で保っていたと思われる。マクセンティウスとの関係がこじれた時イタリアから追い出されたものの、その直前、少なくともマクセンティウスを討伐しにセウエルスがイタリアへやって来た時、セウエルスの兵士たちが元皇帝である彼に従いセウエルスを見捨てる程度にはマクシミアヌスに権威があった。^{②③}コンスタンティヌスがマクシミアヌスを受け入れたのも、マクシミアヌスがまだ保っていた西方での権威と名声を当てにしていたからかもしれない。^{②④}たとえカルヌントウ

ム会議で再度の退位を迫られたといっても、ガリア人の間でもまだ一定の信望を維持していたと見てよいだろう。特に、マクシミアヌスとコンスタンティヌスの二人がガリアで皇帝をしていた約二十年の間にトリア宮廷を中心として形成された行政・軍事組織、そしてそれを担う人的なネットワークをコンスタンティヌスは継承していたと考えられる。コンスタンティヌスの息子であるとはいえ、コンスタンティヌスは西方を訪れてまだ五年しか経っていない。コンスタンティヌスの即位までに、トリア宮廷の内部でも世代交代が進んでいただろうが、もともと東方で軍人として過ごしていたコンスタンティヌスにとって、彼自身の手による新たな廷臣団はまだ完全には形成されていないであろう。例えば、宮廷の元官吏であるこの三二〇年のオートタン人弁論家のように、四分治制時代に官吏として第一線にいた人物にとっては、当時の空気は居心地の悪いものであったに違いない。この弁論家が言うように、マクシミアヌスの反乱は扱いづらい「深い傷（profunda vulnere）」^②だったのだ。この三二〇年の弁論家、オートタン人がかつての宮廷官吏は、どのようにマクシミアヌスの反乱を記述しているのか。

全般的に、肝心な箇所、扱いにくい箇所では表現を曖昧にする傾向があるが、マクシミアヌスの反乱を述べるにあたつて、この弁論家は、以下のように、躊躇しているかのような態度を示す。どう語るべきなのか、今でも非常にためらっている。たとえ反旗を翻したといっても、今でもマクシミアヌスに敬意を払うように、コンスタンティヌスの配慮が強い^③のだから、と。カルヌントウムの会議後、再び退位してからも、コンスタンティヌスから尊重されていたのに、これ以上何を欲して内乱を招いたというのか。年齢ゆえに分別をなくして逸脱に走ったのか、と。^④

三二〇年の称賛演説が語るマクシミアヌス反乱の経過は以下のようなものである。マクシミアヌスは、宿駅所の糧食を使い果たしながら故意に旅程を遅らせ、アルル（古名アレラート）で再度緋衣を纏った。そして軍隊に書簡を送り、兵士らを買収しようとした。しかし、兵士たちはマクシミアヌスの約束した贈り物や名誉よりも、コンスタンティヌスを優先した。^⑤ここで、兵士たちの示した分別と、その兵士たちが従うコンスタンティヌスの美徳とがしばらく述べられるが、結局

マクシミアヌスとコンスタンティヌスがマルセイユ（古名マッシリア）で交戦したことから、この弁論家による弁明ともいえる描写にもかかわらず、マルセイユで籠城するだけの兵士はマクシミアヌスに加担したと想定される。コンスタンティヌスの軍はライン川流域を離れ、ソーヌ川とローヌ川を船で進んでアルルへ向かった。^②その間にマクシミアヌスはアルルを離れ、マルセイユに立て籠もった。コンスタンティヌスは、少なくとも一度はマルセイユに突撃をかけた。^③しかし、相手方の兵士たちが後悔の念から自発的に容赦を求めてくるように配慮し、またマクシミアヌスに対して思い止まったので、一旦後退命令を出した。^④

そのように、あなた「コンスタンティヌス」の敬虔に関わる限り、皇帝よ、あなたは彼「マクシミアヌス」と彼が迎え入れた者全てを救済したのです。だれであれあなたの好意に与ることを望まず、自分が生きるに値しないと判断した者は、それは自らの責任だとするべきでしょう。なぜならあなたのおかげで彼は生きながらえることもできたのだから。あなたの良心にはそれで十分なのですが、あなたはそれに値しない者たちでも許したのです。ですが、こう言うのをお許しください、あなたは全能ではないのです。あなたは不本意でも、神々はあなたのために罰を下すのです。（*Par. Lat.* 6(7) 20.3-4）^⑤

このような判然としない結末でもって、称賛演説におけるマクシミアヌスの反乱は終息する。マルセイユの攻囲戦からマクシミアヌスの死に至るまでの経過はこの称賛演説からはわからない。ただ、とにかくマクシミアヌスの死は本人の責任であるというだけだ。

ここで比較するべきはキリスト教徒ラクタンティウスの伝えるマクシミアヌスの反乱の経過である。四世紀初頭に起こった大迫害の目撃者であるラクタンティウスは、たとえその叙述が迫害皇帝であるディオクレティアヌスやマクシミアヌスに対して敵対的であっても、パネギュリクス同様、当該時期に関する数少ない同時代人の証言者であるのだから。ラクタンティウスは次のように記述する。フランク族が武器を手についた時、マクシミアヌスは、コンスタンティヌスが少数

の兵士だけを率いて向かうように仕向けた。コンスタンティヌスが敵地に入るまで数日待ち、マクシミアヌスは突然緋衣を纏い、宝物庫に押し入ると贈与を行った。しかし、コンスタンティヌスが驚くべき速さで引き返してきたので、準備が間に合わず不意を突かれ、兵士たちはコンスタンティヌスの下に戻った。マクシミアヌスはマルセイユを奪取した。市壁の上に立つマクシミアヌスとそこに近づくコンスタンティヌスとの間で言葉の応酬がなされている時、マクシミアヌスの背後で門が開かれ、マクシミアヌスはコンスタンティヌスにつきだされた。コンスタンティヌスはその緋衣を剥ぎ、叱責をしてから、マクシミアヌスの助命を認めた。^{④⑤}

マルセイユでの事件の後、再度マクシミアヌスが陰謀を企てたことをラクタンティウスは伝える。マクシミアヌスはコンスタンティヌスを寝所で殺害するために、娘ファウスタを呼び出し、協力を迫った。ファウスタは夫にそのことを伝えたので、マクシミアヌスは身代わりの宦官を殺したところで捕らえられた。三一〇年の演説ではファウスタへの言及は一切なされていない。結局、どのような死を迎えるかを選ぶ権利が与えられ、マクシミアヌスは「無惨な死をもたらず括り縄を高い梁に結んだ」と、ラクタンティウスはウエルギリウスを引きながら述べる。^{④⑥}

マクシミアヌスが二度コンスタンティヌスに陰謀を企てたという叙述はラクタンティウスのみである。ラクタンティウスとパネギュリクス、これら二つ以外の史料ではいずれも短い記述しかないが、他史料の叙述は以下の二種類に分けられる。一つは、マクシミアヌスはコンスタンティヌスを殺そうとしていることが露見したので、死を迎えたという簡略なもの。^{④⑦} もう一つは、ファウスタの通報により陰謀が露呈したので失敗したと、ファウスタの関与を伝えるが、二段階の陰謀には言及しないものである。^{④⑧} いずれにせよ、ガリア人弁論家の当惑も、ラクタンティウスのある種過剰な筆致も、後代には消えていることがわかる。

(三) 三二三年およびそれ以後…マクシミアヌス死後の評価

三二三年の称賛演説の主題は、コンスタンティヌスによるイタリア遠征とマクセンティウスに対する勝利であり、その成果をトリアで報告するものである。この作品において、マクセンティウスは暴君として非難される。コンスタンティヌスには、敬虔と寛容、貞節、神聖な規律が備わり、讒訴を廃止し、密告を禁じ、殺人者の血でさえも救った。それに引き換え、マクセンティウスには不信心と残酷さ、情欲、迷信的な悪行が備わり、神殿を略奪し、元老院を殺戮し、飢えによってローマの民衆を殺した。^⑨しかし、マクセンティウスが言葉の限り非難を受けるその一方で、この演説においてはマクセンティウスとその実父マクシミアヌスの血縁関係を否定し、両者を引き離そうという試みがなされているのが注目に値する。マクシミアヌスはマクセンティウスの父親だと思われていたが、実はマクセンティウスは「マクシミアヌスの取替え子 (suppositus Maximiani)」である、と。^⑩これは何を意味するのだろうか。この点について情報を与えてくれる別の史料が、アノニムス・ヴァレシヤヌス (Anonymus Valesianus) と『皇帝略記 (Epitome de Caesaribus)』である。前者によると、ミルウィウス橋の戦いでマクセンティウスが溺死した後、マクセンティウスの母エウトロピアはその息子マクセンティウスの出自を問われ、とあるシリア人男性との間に生まれた子であることを認めたとある。そして後者によれば、シリア人であるエウトロピアは夫マクシミアヌスを欺き、マクセンティウスを「取替え子」にしたと人々は伝えているという。このようなことから、三二三年の弁論家も、マクセンティウスにはマクシミアヌスとの血のつながりがないことを伝えているとみなしてよさそうである。ラクタンティウスにはこのような記述はない。また、この三二三年の演説の後、三二一年のナザリウスによる演説では、三二三年の演説同様に、コンスタンティヌスのイタリア遠征とマクセンティウスへの勝利が主題であるにもかかわらず、そこにマクシミアヌスは登場しない。

ナザリウスの演説において見られるように、暴君としてのマクセンティウス像は定着したが、^⑪それとは逆に、マクシミ

アヌスに関してはその間に名誉回復がなされたと考えられている。三一五年にローマ元老院がコンスタンティヌスに捧げた凱旋門には、マクシミアヌスを描いた像が登場する。^⑭そして、三一七／八年にコンスタンティヌスの側で発行された貨幣には、クラウディウス、コンスタンティウスと並んで「神君（*Divus*）」となったマクシミアヌスが現れているのである。^⑮以上のことから、マクセンティウスの死後、マクシミアヌスに関してコンスタンティヌス宮廷の側でなんらかの情報操作が行われ、マクシミアヌスとマクセンティウスの血縁は切り離され、コンスタンティヌスの発するプロバガンダの次元においては、マクシミアヌスの死後の名誉は回復されたと言ってよいだろう。もっとも、より後代の史料記述を見る限り、この宮廷側のプロバガンダは機能したとしても同時代に限られたもので、後世に伝わることはほとんどなかったようである。上述したように、アノニムス・ウアレシアヌスと『皇帝略記』にその痕跡が見られる程度でしかない。

（四）プロバガンダの担い手と受け取り手

これまで、四世紀初めに成立したコンスタンティヌス側のプロバガンダ、特にマクシミアヌスとの関係に焦点を当てたそれを辿ってきた。以下では、そのようなプロバガンダの担い手と受け取り手に注目し、プロバガンダの発信と受容の問題に迫ってみたい。

ガリア人弁論家たちがトリア宮廷のプロバガンディストだったことは一見疑いの余地がないように思われる。前章で述べたように、三一〇年の演説家は元宮廷官吏であり、彼の息子一人と弟子たちの何人かは同じように皇帝の近辺で職務を果たしている。また他の作者の内、二九七年の弁論家もかつては宮廷の役人であり、二九八年のエウメニウスは元起草局長官である。^⑯三〇〇年前後頃のガリア人弁論家たちがトリア宮廷の皇帝たちとコネクションを持っていた可能性は高い。それでは、彼らはただ皇帝の意向に従いプロバガンダを垂れ流すだけであったのだろうか。ここではそのプロバガンダを発信する役割を担っている弁論家が、まさにガリア人であるという点に注目して考察してみよう。

二八九年から三一三年にかけて称賛演説を作成してきたガリア人弁論家たちは、彼らの住まうガリアへの関心が強い。特にオートン出身の弁論家たちは、自らの故郷の利害を代弁している。^⑩プロパガンダの担い手はガリアにゆかりのある人物であるが、では受け取り手はだれなのか。

これらの演説は、演説という形を取っている以上、元は人前で読まれた可能性と、その際に及ぼす影響とを考慮せねばならない。演説発表の場に居合わせた者、それが直接の受け取り手である。先に述べたように、コンスタンティヌスによるオートンへの免税措置に感謝を述べる三一二年の演説の作者は、演説発表の場に皇帝、廷臣、宮廷官吏、そして周囲の町々から派遣されてきた代表者や嘆願者がいることを示唆している。^⑪これ以外の演説の場においても同様であつた可能性は高い。従って、プロパガンダの第一の受け取り手は、皇帝自身、役人、そしてガリア人の名士たちであると考えてよい。

ここで、称賛演説のレトリックとしての性格を思い出しておこう。称賛演説は見世物としての要素が強い演示弁論であるが、聴衆に対して特定の意見・価値観への同意や共鳴を引き起こす可能性はある。議会弁論や法廷弁論とは異なり、演示弁論は即座になんらかの選択を聴衆に要求するものではないが、聴衆の感情や一体感に訴えかけることで意見を特定の方向へ誘導するということは十分考えられる。また、異論を招くもの、聴衆の間に亀裂を生むようなトピックは排除される。^⑫このように考えれば、称賛演説も、そこで提示される事柄に関して聴衆の意見の一致や共鳴を促すものとみなすことができる。

この点に留意して、ガリアでの称賛演説の機能を考えてみよう。まず演説の内容は、式典の場にふさわしく、称賛演説の聴き手である、皇帝、官吏、ガリア人、以上三者にとって受容できるもの、少なくとも明確な拒否を引き起こさない程度のものでなければならぬ。マクシミアヌスへの態度の変化も、コンスタンティヌス宮廷の意向の反映であると同時に、ガリアにおいて受け容れられる次元のものに設定されているといえよう。コンスタンティヌス一族の出自にしても、マクシミアヌスとマクセンティウスの血縁のことも、たとえそれらが虚偽のものであっても、演説発表の場ではだれもが受け

容れられるもの、言わば「同意された嘘」として提示されねばならない。その意味で、称賛演説発表の場は政策に関わる次元での同意の形成、あるいは同意が形成された事を確認するための機会といえる。この意味で、彼らはプロパガンディストである。当時のトリア宮廷周辺においては、ラクタンティウスとは違って、キリスト教徒に対して配慮する必要はなかった。そして、ガリアにゆかりの深い皇帝として、コンスタンティヌスの妻ファウスタの父として、マクシミアヌスへの批判は曖昧なものですませなければならなかった。これらの言説は宮廷の意向の反映であると同時に、ガリア人という聴き手を意識したプロパガンダでもある。

プロパガンダとしての機能を最初から付与された文書を史料としてみる場合、当然のことであるが、そのプロパガンダが発信された時点・場所を考慮に入れなければ正確に理解することはできない。そして、その時点と場所とを、つまり当初のコンテクストを一旦離れると、その本来の機能と意味は失われ、プロパガンダの中身は簡略化された形で残るか、または消失する。マクシミアヌスは生来思慮分別を欠いた人間として伝わり、彼の反乱の経過も簡素になり、貨幣という別の伝達手段によっていくらか広められたにもかかわらず、事件当時のガリアでの微妙な空気は叙述から消えた。マクセンティウスにはマクシミアヌスとの血のつながりがないという主張も、一部の史料を除いて痕跡を消した。しかし、ガリアの弁論家たちの活動は、まさに政治的事件とプロパガンダの形成・変化が進行しているさまを垣間見せてくれるし、ガリア人とトリア宮廷の深い結び付きが存在した可能性を示唆してくれるのである。

- ① デイオクレティアヌスからコンスタンティヌスの時代にかけてのク
ロノロジーに関しては、各研究者間で見解が異なり非常に錯綜して
るので、本稿におおむね便宜的に T. D. Barnes, *op. cit.* に従う。
- ② *Pan. Lat.* 10(2) 14.4.
- ③ *Pan. Lat.* 8(4) 13.3.
- ④ *Lactant. De mort. pers.* 26.6f.
- ⑤ *Ibid.*, 27.1.
- ⑥ *Pan. Lat.* 7(6) 10.3f.
- ⑦ *Ibid.*, 11.4.
- ⑧ *Ibid.*, 11.1-6.
- ⑨ *Ibid.*, 9.5.
- ⑩ *Ibid.*, 1.1.
- ⑪ *Ibid.*, 5.3.
- ⑫ *Ibid.*, 3.3f.

に傾きがちな男で、不誠実にして無慈悲、市民的な性質からは全く縁遠い者だった」(……uir ad omnem acerbiam saenitiamque proc-

hitis, infidus, incommodus, ciuitatis penitus expers.)
⑤ 上述のアノニムス・ウァレシヌスと「皇帝略記」。

おわりに

本稿ではこれまで、三〇〇年前後頃のオータンを中心とするガリアの弁論家と宮廷との関係を論述してきた。第二章において、当該時期のガリア人、特にオータン出身者がトリア宮廷と友好的な関係にあったことを述べたが、ここで、第二章の末尾で浮かび上がった問題、なぜこの友好的な関係が途絶えたのか、この点に再び戻ろう。

第三章から明らかのように、彼らは四分治制時代の皇帝と縁のある、コンスタンティヌスにとっては前政権と結び付いた弁論家であった。三〇七年および三一〇年の演説から、退位後もマクシミアヌスの存在感がガリアでは強かったことがわかる。父コンスタンティウスから統治機構を受け継ぎ、マクシミアヌスの娘ファウスタを妻とし、またその息子マクセンティウスをライヴァルとしていたコンスタンティヌスは、当時はこの点に配慮していた。しかし、マクセンティウスが敗北しコンスタンティヌスが東へと動き出す頃には、マクシミアヌスやコンスタンティウスの四分治制時代のイデオロギーやプロパガンダは、記憶から、現実に進行している政治の舞台からも、徐々に消えていった。皇帝が移動するとそれまでのコネクションが容易に途絶することは、後代のアウソニウスの例からもわかる。① かつてガリア人が皇帝マクシミアヌスをガリアに求めたのと同じように、三三一年のナザリウスが語るところでは、ガリア人は今クリスプスを求めている。② 皇帝を自分たちの地方に呼び求める行為に変わりはないのだが、既に別の時代に移っているのである。オータン人たちは四分治制時代の政治体制と結び付き過ぎていた。オータンとトリア宮廷とのコネクションもある意味で四分治制の副産物だったといえよう。皇帝にまつわるプロパガンダと同様に、オータン弁論家の活動の基盤も四分治制という政治的文脈から離れると機能が失われてしまったのだ。確かにこれはオータン人らにとっての限界と言えよう。だが、このよう

な活動はオートン人のみに許されたものだろうか。史料状況からは、同時期に他の皇帝の下でも同じような現象が起こったかどうかは不明である。しかし、ガリアのオートンの事例が例外的で特殊なものとはやはり考えにくい。古代末期は称賛演説の「黄金時代」である。^④帝政後期にレトリック教養が重要性を持ったことから、同じような活動が他でも実践されていた可能性は高い。

本稿で示したように、称賛演説は単に皇帝側の意向を公示するのみならず、聴衆全体の同意を醸成するような、社会的な作用を潜在的に有している。称賛演説は、皇帝の存在抜きには成立しないが、皇帝だけを表出するものでもない。ここでの弁論家は、弁論の背後にいる聴衆全体にとつての媒介者である。単に皇帝の意に従うのではなく、帝国運営を支える者たちの利害と皇帝とを結び付けて公に提示する、これが称賛演説におけるレトリックの役割である。宮廷が各地に置かれ皇帝権力が分散するこの時期に、この種のレトリックが前面に出てくるのは偶然ではあるまい。レトリックの史料を読み解けば、東西分裂へ至る過渡期の帝国運営における、政治的決定のメカニズムを描き出すことができると筆者は考えている。当然、他の事例、特に東西での相違と類似について研究せねばならないが、それは他日を期したい。

① H. Sivan, *Ausonius of Bordeaux: Genesis of a Gallic Aristocracy*, London, New York, 1993, p.138ff.

② *Pan. Lat.* 10(2) 14.4f.

③ *Pan. Lat.* 4(10) 37.4.
④ 第一章註⑧。

and the individual assemblages become uniform. The entire and individual assemblages begin to resemble one another. At phase IV the tendency grows more pronounced. The number of shapes included in the entire assemblage diminishes more, and individual assemblages are standardized. The entire and individual assemblages closely resemble one another. In short, in spite of the introduction of new arrowhead shapes at each stage, the number of shapes gradually diminishes. The changes in shapes and assemblages occurred at the time approaching the uniformity of phase IV. Consequently, arrowhead style had been standardized since the early fourth century (phase II). For this reason I think that until the beginning of the fourth century (phase I) the manufacturing system varied and distribution system was limited. Then, the manufacturing system had been united and the distribution system spread its boundaries step by step from the early fourth century (phase II).

The unity of manufacturing system and the widening of the distribution system, which started in the early fourth century, occurred simultaneously with introduction of early types of iron cuirass (*tatehagiita kawatoji tanko* and *houkeiban kawatoji tanko*), which are thought to have been distributed by the central polity of ancient Japan. New forms of arrowheads that were adopted early in the fourth century and late fourth century (phase II-III) were frequently associated with these iron cuirass. Consequently I surmise that the innovation of shapes and assemblages and the expansion of the manufacturing and distribute systems of arrowheads were promoted by the central polity of ancient Japan.

Orator and Emperor in Tetrarchic Gaul: The Connection between Court and Provincials in *Panegyrici Latini*

by

NISHIMURA Masahiro

This article focuses on Latin panegyrics from the late 3rd to early 4th centuries that are preserved in the corpus of *XII Panegyrici Latini*. A panegyric is a laudatory speech that is designed to be delivered on festive occasions for dignitaries and (especially) emperors. *XII Panegyrici Latini* contains 12 panegyrics by the Younger Pliny, Pacatus, Claudius Mamertinus, Nazarius, Eumenius of Autun, and other anonymous orators. Eight of these are concentrated in the years 289-313 and were delivered by Gallic rhetors mainly in Trier to praise imperial

achievements and anniversaries. The Gallic panegyrics that are discussed here indicate an intimate connection between the court in Trier and Gallic orators in the Tetrarchic age. Here I deal with two characteristics of these panegyrics.

The first characteristic is the eminent position of Autun. Four of the 12 *Panegyrici* were definitely delivered by orators from the city of Aeduans, Autun. These Aeduan panegyrists suggest that they were ex-officials of the court, possibly employed in the early days of the Tetrarchy. The panegyrist of 297 was recommended to Maximian by Constantius, and Eumenius of Autun was *magister memoriae* (a chief-official of secretariats and its function ranging from judicial, administrative, to diplomatic spheres) in the court of Trier. The panegyrist of 310, who himself had held some posts in the court, had a son serving Constantine as an *advocatus fisci* (a senior legal officer representing the interests of the imperial treasury against private individuals) and many of his disciples were employed in law-courts and administration. These orators were also proud of the benefits and imperial favor that they brought to their hometown, such as the reconstruction of buildings, private and public, aqueducts, public baths and a school of rhetoric. Particularly remarkable is the reduction of tax burdens for Autun, which was permitted by Constantine in 311, and a representative of Autun gave an official thanksgiving speech as a panegyric in 312.

The second characteristic is the propagandistic aspect. The description of Maximian is worthy of attention. At the marriage of Constantine and Fausta (Maximian's daughter) in 307, Maximian is praised as a senior Augustus to Constantine and a guarantor of the latter's legitimacy. After his revolt against Constantine and its failure in 310, Maximian became an object of vituperation. The Aeduan orator of 310, however, shows reluctance and perplexity in denouncing Maximian as a mere traitor, and avoids severe and outspoken criticism of him. To speak about the revolt and death of Maximian was a 'profound wound (*profunda vulnera*)' for him. Finally, after the battle of Milvian Bridge, the panegyrist of 313 declared in Trier that Maxentius, who was in fact a son of the deceased Maximian and who was defeated in that battle, was a changeling and denied any blood relationship with Maximian. Numismatic evidence shows Maximian was treated as a '*divus*' as well as Claudius Gothicus and Constantius (a fictitious ancestor and the real father of Constantine) later in 317/8. Maximian is thus praised at first, then killed in disgrace, and rehabilitated posthumously in the propagandistic narratives in Gallic panegyrics.

From the date and content of Gallic panegyrics, it is thought that these orators seized the opportunity to serve as officials and gain prominent positions in local society as soon as Maximian came to Gaul and established his court in Trier.

Aeduan utilized this access to the court for the revitalization of their hometown. This connection, which had been constructed in the Tetrarchic political system, was still effective in the early Constantinian period and enabled Autun to obtain tax reduction. At the same time, Maximian's revolt had to be treated in a restrained manner within panegyric discourse because Maximian was the source of authority both for Constantine and for prominent Gallic ex-officials. This close tie with Gaul, however, seems to have collapsed immediately after Constantine's victory over Maxentius. Their relationship that had originated in the age of the Tetrarchy could not be sustained once deprived of the political background of the Tetrarchy.

A History of Campaigns in Kyoto for Establishing a National
Assembly: Formation of the Draft Constitution of the Empire
of Japan [*Dainipponkoku Kenpo*] and Seishu Sawabe

by

IZUKA Kazuyuki

The Draft Constitution of the Empire of Japan [*Dainipponkoku Kenpo*] was one of the few civic constitutional drafts drawn up before the second meeting of the League for Establishing a National Assembly [Kokkai Kisei Domei]. However, due to limitation of historical materials, basic points had been unclear, for example, who wrote it and why it was written, until a new historical source document from the Inaba Family Archive revealed that the draft was made in quite a short period of time by Seishu Sawabe, the president of Tenkyogijuku School. Sawabe attended a speech by Misao Wada, the head of the Chikuzen Kyoaikai group, in Miyazu in September 1880 and was inspired by the group's draft constitution. The *Dainipponkoku Kenpo* was slightly amended by prefectural lawmakers elected from the Tango region before it was printed and published. From the standpoint of the Chikuzen Kyoaikai group, the formulation of the *Dainipponkoku Kenpo* and Sawabe's participation in the second meeting of the Kokkai Kisei Domei were typical examples of the success of its speech tour. The Chikuzen Kyoaikai group, in an effort to take the initiative in the second assembly of the Kokkai Kisei Domei by developing its own draft constitution earlier than its rivals, thus succeeded in gaining sympathizers outside of Kyushu. In this way, the pro-democracy faction in Kyoto led by Seishu Sawabe and the Chikuzen Kyoaikai group formed the core of what Junji Banno called the "*zaichi-minken-uha*" (local right-wing alliance for democracy).